

来日して28年目を迎える私

——日本での生活を振り返って

株式会社J B ネット 代表取締役
守屋留學生交流協会 第21回奨学生

シヤヒン モハメド

ミザヌル ラハマン



◆略歴◆

- 1977年 バングラデシュのラジシャヒ県生まれ
- 1994年 ダッカカレッジ（高等学校）卒業
- 1996年 日本へ留学（国際学友会日本語学校）
- 1998年 拓殖大学商学部 入学
- 2004年 拓殖大学大学院商学研究科経営情報修士課程修了
- 2004年 IT企業に就職
- 2009年 株式会社J B ネット設立 代表取締役就任

◆はじめに◆

インドに囲まれた小さな国であるバングラデシュから留學生として来日して以来、27年間日本に暮らしています。バングラデシュは日本の4割の小さな国土に、約一億七千万の人口を有する、世界的にみて人口密度の高い国です。公用語はベンガル語で、約9割がムスリム、約1割がヒンドゥー教徒となっています。1947年のインド・パキスタン分離独立当時は、ムスリムが多いことからパキスタンへの帰属を選択しましたが、

ベンガル人としてのアイデンティティを訴えた独立戦争を経て、1971年にパキスタンから独立しました。一人あたりのGDPは約二千七〇〇ドル（2022年）で、衣料・縫製産業や農業がおもな産業です。

バングラデシュの一般的な家庭で育った私は、高校で勉強した日本に関心をもち、日本の素晴らしい技術を学びたいという夢がありました。そして高校卒業後、当時日本に留学していた遠い親戚の協力を得て夢が叶い、拓殖大学・大学院で経営情報学を修めることができました。本稿では、日本で生活する外国人としての視点から、日本の生活で私自身が感じたことを紹介します。

◆日本の生活へのとまどい◆

来日の際は、高校時代に見た日本のドラマ「おしん」をイメージしていましたが、高層ビルが建ち並び、高速道路を大量の車が行き交う東京の様子に驚きました。そして家族と離れ一人きりでの生活は、高校を卒業したばかりの私にとっては、

右も左もわからず、さびしくつらい日々でした。

寮の食事が口に合わず、宗教上の理由で食べられないものもあり、最初はとても苦労しました。当時はムスリムの学生も多くなかったため、食堂のおじさんやおばさんは私たちの習慣をあまり知らなかったのだと思います。大学では一般授業が終わったあとにも漢字の特別授業があり、寮に戻っても中国、台湾、韓国の留學生ばかりで話を通じず、心休まる時がありませんでした。しかし、そのおかげで誰よりも早く日本語が上達し、気づけば会話の成績は一番になっていました。

三か月たったころには、日本の食事もおいしく食べられるようになり、たくさんの方たちもでき、日本の生活にもなじみました。学校生活以外にも、いろいろな国籍の留學生や日本人の学生とともに、サークル活動などの課外活動にも積極的に取り組むようになりました。

◆将来に無関心な日本の学生◆

大学生活の思い出の一つに、スピーチコンテス





Bangladeshの奨学金財団の学生たち
 (後列左端が筆者。ラジシャヒ県バガ市。2023年撮影)

トへの出場があります。そのときは「ここがへん日本の学生」という題目で、優勝することができました。スピーチの内容は、日本に来て感じた Bangladeshの学生と日本の学生の違いについてです。

日本の大学は施設や設備がすばらしく、受けた講義も自由に選択することができ、学生たちはとても恵まれた環境にあります。それにもかかわらず勉強に興味をもたない学生が少なくありませんでした。また、自分の将来の夢や計画にも無関心で、決められたルールにそっていけば何とかなるという考えの学生も多くいました。「国のことは政府が決めるから自分たちは税金を払うだけでよい」と、国の将来をしっかりと考える学生も少ないと思えました。このような日本の学生の態度に、Bangladeshとの違いを感じていました。

当時の私は、母国と日本のために何かしたいと考えていました。そして日本の小学生、中学生に国際理解教育という授業で Bangladeshやアジアの国々のことを教えるようになりました。今も依頼があれば、忙しくても「NO」と言わずに続けています。母国 Bangladeshについて、日本の子どもたちにも知ってもらいたい、将来に役立ててもらいたいと思っ

ているからです。
ある小学校で児童に Bangladeshの国旗を見せたら、「日本の国旗と似ている」と

喜んでくれました。そして私が「日本の国旗の真ん中はなぜ赤い丸なのですか」と聞くと、「白ご飯に梅干がのっている様子を表しているから」という答えが返ってきました。このようなおもしろいやりとりの一つひとつが、よい思い出です。こうした授業のおかげで日本の子どもたちと交流でき、私自身もいろいろなことを勉強することができました。他にも、ロータリークラブを通じてさまざまな活動を続けています。

◆日本の「おもてなし」◆

お客さんに対して丁寧にもてなすのが Bangladesh人の特徴ですが、日本人はそれ以上に親切であり、日本は住みやすい国であると思います。さらに、日本は以前と比べ、外国人への対応が大きく変わってきています。「おもてなし」の心で外国人を歓迎するようになったことは、私たち外国人にとってうれしいことです。最近では、イスラム圏から観光やビジネスで日本を訪れる人を受け入れる体制も整備されてきていて、安心して外食できる場所も増えており、感謝しています。

私の話に戻りますと、修士課程修了後、日本に残るか母国に戻るかの選択には迷いました。しかし、日本での生活にも慣れ、日本のことが本当に好きになっていたので、日本に残って就職することに決めました。私の夢はビジネスマンになることでした。5年間、IT企業で仕事を経験したのち、2009年に会社を立ち上げ、現在は15年目になります。会社を立ち上げる前は、外国人である自分が、日本で会社を運営できるのかと不安がありました。今ではIT通信ネットワーク、ア

パレル、ハラル食品販売分野で日々がんばっています。最近では日本に住む外国人が増えて需要が高まっているため、ハラル食品の小売店舗を増やしています。日本全国においても、ハラル食品の店舗は増えており、輸入商品の卸販売も好調です。

◆おわりに◆

「人は人のために」。私はこの言葉を信じています。南アジアの発展途上国から日本に留学してきた私は、いろいろなアルバイトをしたり奨学金をいただいたりすることで勉強を続けてこられました。とくにこの場で感謝したいのは、守屋留学生交流協会とロータリー米山記念奨学会です。このような奨学金制度があるからこそ、私たち留学生は安心して勉強ができるのだと思います。お金だけではなく、日常生活や勉強に関するアドバイスやあたたかい応援も力になりました。私の27年間の日本生活を振り返ると、やはり日本の方々の応援の言葉と支えのおかげで、夢に向かって歩いてこられたのだと思います。

多くの人々が私に手をさしのべてくれたように、私も誰かのために何かしていきたいという気持ちを持ち、Bangladeshに奨学金財団を作りました。今年で11年目になりますが、毎年25人の中学生や高校生に、毎月奨学金を出しています。

これからも、日本への感謝とともに日本と Bangladeshの架け橋になりたいと考えています。今後も、あたたかい応援の手をさしのべていただければ幸いです。そして将来は、日本で学んだ経験を生かして Bangladeshの発展に貢献したいと思っています。